

琉球大学学術リポジトリ

沖縄におけるライフコースのコーホート間比較調査 中間報告：調査報告書

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部社会学学科 公開日: 2009-03-04 キーワード (Ja): ライフコース, ライフサイクル, 生涯発達, コーホート分析, 役割移行, 社会史, 沖縄 キーワード (En): 作成者: 安藤, 由美, Ando, Yumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9048

文部省科学研究費助成
奨励研究(A)06851029

調査報告書

沖縄におけるライフコースの
コーホート間比較調査

中間報告

1995年9月

琉球大学法文学部

社会学専攻社会学実習クラス

調査報告書

沖縄におけるライフコースのコーホート間比較調査
中間報告

目次

1	はじめに	1
2	対象者のプロフィール	6
3	家族経歴	16
4	教育経歴	40
5	職業経歴	47
6	居住経歴と自宅の取得	61
7	おわりに	66

琉球大学附属図書館



0000964006573

琉球大学法文学部社会学学科

社会学専攻社会学実習クラス (担当 安藤由美)

赤嶺由紀子	穴田勝美	大田純子
照屋和彦	野原あやの	原槇 貴
比嘉俊次	比屋根准子	宮平隆央
森本博勝		

1 はじめに

1.1 研究の目的と経緯

本書は、琉球大学法文学部社会学科社会学専攻の平成6年度社会学実習クラスによる、「沖縄における人生の発達の・歴史的変化についての調査研究」と題して実施された調査研究の中間報告書である。本調査研究は、個人が生きてきた過程を、人生上の主要な出来事の実験の時機と内容からライフコースとして再構成し、それを出生年を異にするコーホート集団（同時出生集団）間で比較することを通じて、ライフコースがそのコーホート特有の時代背景のなかで現在まで展開してきたようすを記述し説明することを目的としている。

本調査研究は、社会学実習クラスの担当教官である安藤が参加している、早稲田大学人間総合研究センター「社会変動と人間発達」プロジェクトにおいて実施された、「人生における出来事経験のコーホート間比較調査」で得られたデータと比較可能なデータを沖縄で収集し、相互に比較分析を行うというねらいをもって企画された。早稲田大学のプロジェクトでは、1988年に東京都新宿区、翌1989年に福島県福島市において、5つの出生コーホート男女(1914～1918年、1924～1928年、1934～1938年、1944～1948年、1954～1958年をそれぞれの出生年とする合計1,658名)を対象として第1次調査を行い、ライフコースのコーホート間およびコーホート内比較分析を行った。さらに、第2次調査が、福島データについては1990年に、東京データについては1991年に実施されている。これらの結果については、個別報告書がすでに発刊されている（『昭和期を生きた人びと』1990年、『昭和期を生きた人びと（地方都市編）』1991年、『ライフコースの形成と転機』1992年、いずれも早稲田大学人間総合研究センターより刊行）。また、2つのデータセットを合体した最終報告書も近々に発刊予定である。

あとでも述べるように、本報告書がとりあげる沖縄データは、これらの先行調査の標本の一部と同じ出生コーホートを設定し、また、調査項目もできるだけ共通なものとした。残念ながら、1年間という期間では、当初企画していた東京・福島と沖縄との比較を行うにはおおよぼ、今回は、沖縄データの単純集計結果を主体とする報告にとどまった。その意味で、本書は、あくまでも中間

報告であることをおことわりしておきたい。また、本調査は、文部省科学研究費補助金の助成（奨励研究(A)、課題番号 06851029）を受けて行われたことも付け加えておく。

1.2 調査の概要

調査対象者の選定にあたっては、調査の企画段階から、対象とする出生コホートを早稲田大学の標本構成に習って設定することをデザインに含めてはいたが、実習クラスの規模からして、5つの出生コホートの男女、計10グループすべてを1度に対象とするのは不可能であった。そこで、今回は、年長の2つのコホート男女、計4グループを対象とすることにした。ライフコースの時代差をはっきりと出すためには、連続するコホートではなく、少し出生年が離れたコホートを比較したほうがベターかもしれない。しかし、最年長のコホートはいうまでもなく、2番目のコホートもすでに高齢に達しており、かれらのライフコースについてのデータ収集を急ぐべきであると判断されたので、上記のような設定になった。対象者の出生年は、表1-1を参照されたい。なお、本書では、以下、2つのコホートのうち年長のほうを「C-I」、若いほうを「C-II」と表記する。また、文中、それぞれのコホートの男女の各集団を、「グループ」とよぶことにする。

調査対象地は、できるだけ沖縄県の平均的な地域的・人口的特性を備えており、しかも大学から近い場所ということで、沖縄本島の中部地域から西原町を、南部地域から南風原町と豊見城村の、計3町村を選んだ。

標本抽出は、住民基本台帳をもとに、主として等間隔抽出法により425名を抽出した。実査は、調査票を用いた訪問面接法により、平成6年7月28日～8月19日の期間に実施し、有効回

表1-1 対象者の出生年

コホート	出生年	年齢	男性	女性
C-I	1914 大正 3	80	10	11
	1915 4	79	9	11
	1916 5	78	9	12
	1917 6	77	11	13
	1918 7	76	10	9
	計			49
C-II	1924 大正 13	70	12	6
	1925 14	69	7	16
	1926 15	68	15	7
	1927 昭和 2	67	14	16
	1928 3	66	18	14
	計			66

注：数字は実数。

年齢は平成6年12月31日現在の満年齢。

収票数 230、有効回収率は 54.1%であった。最終的な分析対象者数と、その年齢別構成は、表1-1に掲げたとおりである。

1.3 研究の枠組と分析の方法

本書では、個人の人生の展開過程を、社会的役割の取得・変容・喪失をもたらすと考えられる出来事の継起としてとらえ、諸出来事の経験の有無、時機、経験の内容から再構成したものをライフコースとよんでいる。時機 timing とは、出来事が経験される時間的な位置関係をあらわす概念であり、たんに何歳で経験したかといった経験年齢、すなわち生涯時間軸上の位置だけでなく、歴史時間軸上の位置を表す経験年次、あるいは個人が所属する集団や組織の時間軸上の位置（所属年数や、ほかの出来事との順序・間隔）など、いくつかの次元を含む複合的な指標であるが、本書では、とくに、個人の生涯時間上の発達過程と、歴史的条件あるいは社会変動とのかかわりを記述するという目的に照らして、経験年齢と経験年次（年代）をとりあげた。たとえば、ある人は初婚を 1945（昭和 20）年に 22 歳で経験したといったような測定のしかたをした。

このようにして再構成されたライフコースは、ほんらい個人水準の経験であるが、本研究では、分析にあたって、それを集合（集団）の水準でとりあつかっている。具体的には、出生コーホート集合および性別を単位とし、経験の有無はこれらの集合における経験率、経験年齢や年次は中央値で表される平均的な年齢や年次が問題にされる。というのも、われわれは、個人の出来事経験は、条件を同じくする集合（集団）は似たようなものになり、それが異なる集合体どうしでは違ったものになる、いいかえれば規則性ないしパターンが存在すると仮定しており、その条件のなかでも重要なものとして、歴史時間への位置づけ、すなわち出生年を考えているからである。ライフコースの歴史的变化の記述・説明のために出生コーホートを用いたのはこのような理由による。これに加えて、このほかにも、本書では、性別をもうひとつの比較軸としてとりあげた。性別は、生物学的・心理学的に重要な意味をもつばかりでなく、文化的に規定された社会的カテゴリーとして、ライフコースをパターン化するキー変数であると考えられる。

そして、ライフコースのパターンを発見するための手がかりとして、われわれは、出来事経験の「標準性 normativeness」という概念を用いている。ある

出来事が標準的 normative であることの基準というものは単純ではなく、ここで詳しく述べている余裕はないが、本書では、操作的に、経験率が 75%以上の出来事を標準的な経験とし、また、経験時機については、後から述べるように、中央値を中心として全体の半数が経験する時機を標準的な経験幅としている。

以上のような枠組にもとづいて、本書では、一貫して、出来事の実験率、そして経験年齢・年次の中央値とばらつきを、2つの出生コーホート間および男女間で比較し、その類似性と相違を明らかにするという作業を行っていくことになる。

ここで、本書における年齢・年次のあつかい方および尺度について説明しておこう。経験年齢は、誕生日の前後によって年次の値との齟齬が生じないように、各個人が経験した年の12月末日時点での年齢を用いた。これをもとに、コーホートの代表値として中央値 Median (Med.と表記。以下同じ)を、各出来事のコーホート全体としての経験速度またはばらつき(個人差)の指標として四分位数(Q1・Q3)・四分位範囲(QR)を、それぞれ用いた。通常用いられる平均値や標準偏差のかわりに、これらの統計的指標を用いる理由は、未経験者を母数に含められるという利点があるからである。それぞれの数値の意味としては、中央値は男女各コーホートの半数の人が経験し終えた年齢・年次を、第1四分位数(Q1)は同じく早いほうから4分の1の人、第3四分位数(Q3)は4分の3の人が経験し終えた年齢または年次を表している。また、四分位範囲(QR)は、Q3とQ1の差をとったもので、中央値を中心に半数の人が経験するゾーンを表している。次章以下では、家族や職業といった、ライフコースを構成する主要な役割あるいは生活領域の展開の軌跡(経歴)ごとに、これらの数値を提示していく。

さきにも述べたように、本書は沖縄データの単純集計結果の提示のみにとどまっており、東京・福島データとの比較はおろか、対象者のライフコースの特徴を充分にとらえるところまでも至っていない。しかし、不十分ながらも、どうか中間報告書を刊行できたことに、担当教官としては多少安堵している。なお、当初の目標に少しでも近づくために、本調査研究は、平成7年度の社会学実習履修学生によって受け継がれ、標本数の追加のための補充調査と、東京・福島データとの比較を含めたさらなる分析が行われていることを付け加えてお

きたい。

最後になったが、社会学実習調査の趣旨を理解くださり、対象者の選定にあたって全面的にご協力をいただいた、豊見城村、西原町、南風原町の3町村に対して、深く感謝している。そして、なによりもまして、お忙しいなか学生たちの拙いインタビューに快く応じてくださった、調査対象者のみなさまのご協力に対して心よりお礼申し上げる次第である。

琉球大学法文学部
助教授 安藤由美